金子みすゞ『南京玉』に見られる3歳児のことばの発音

濱千代　いづみ

1. はじめに

『南京玉』は金子みすゞ（明治36年－昭和5年／1903－1930）が長女のことばを書き留めた記録である。その期間は昭和4年（1929）10月下旬から翌5年2月9日までにわたり、その時期は長女の2歳11か月から3歳2か月までに相当する。一人の母親が我が子の日常のことばを聞き取り、その発音を書き留めた。特定の3歳児のことばの記録ではあるが、実験によって得られた結果ではなく、日常の発話における調音の記録であるところに大きな価値がある。その記録が『南京玉』の題名でJULA出版局から発行された。濱千代（2019）では『南京玉』の語彙を計量し、3歳児のことばの特色を探った。そのときには、オカチイもオカシイも「おかしい」という見出し語に整理して計量した。本研究では金子みすゞの表記に着目して、オカチイのように本来の発音とは異なると判断できることばを取り出し、調音（音韻）上の特色を追究する。

2. 子音の調音獲得の過程

まず、幼児が子音の調音方法を獲得していく過程を年齢別で概観する。今までに何組かの研究者によって幼児の調音調査が行われ、報告されている。調査は準備したことばを被検児に発音してもらい、それを整理するという方法をとる。この方法は被検児数分の結果が得られ、一定の方向を捉えるのに適している。被検児全体の90%を超える人数が調音を確立できた子音について、(a) 高木・安田（1967）[注1]、(b)野田ほか（1968）[注2]、(c)中西・大和田ほか（1972）[注3]、(d) 船山・阿部ほか（1989）[注4]の調査報告者ごとに、幼児の年齢別に整理して示すと、表1のようである。なお、表1に関して次の点を補足しておく。以下、表1、表2以外で子音母音を記号で記述する場合には、[　]を付けて示すことにする。

補足1　(a) 高木・安田で、年齢6:0～6:5において[s]・[dz]は75%、[r]・[ts]は80%、[c]は85%である。

補足2　(c)中西・大和田ほかの調査は年齢4歳(4:0)の幼児から行われているので、それ

より前に調音が確立していたとしても4歳以降の年齢に子音が記入してある。

補足 3　(c) 中西・大和田ほかでは、[ɸ]を[h]に含めている。

補足 4　(d) 船山・阿部ほかの結果は80%を超える人数の調音確立で示してある。

補足 5　(d) 船山・阿部ほかで、5:0〜5:3において[r]は40〜59%、[dz]は60〜79%である。

表 1　日本語子音の調音確立の時期

調査報告者 調査年齢(年:月)		(a)高木・安田 3:0〜6:5	(b)野田ほか 2:0〜6:6	(c)中西・大和田ほか 4:0〜6:11	(d)船山・阿部ほか 3:0〜5:3
年齢の段階	2:0〜2:11				
	3:0〜3:5	j,p,t,g,tɕ,dz, d,m,b	m,b,tɕ,j,t		p,m,d,j,b,t,n, dz,g,h,w,tɕ
	3:6〜3:11	ɸ,n	p,k,g,dz		ɕ
	4:0〜4:5	ç,h,k,w	n,h,ç,ɸ,r	w,j,h,ç,p,b,m, t,d,n,k,g,tɕ,dz	ɸ,k,ç
	4:6〜4:11		d,w	ɕ	s,ts
	5:0〜5:5		ɕ	s,ts	
	5:6〜5:11		s,dz,ts	r,dz	
	6:0以上				

表 1 において、年齢 3 歳 5 か月（3:5）以前に、報告者(a) 高木・安田、(b) 野田ほか、(d) 船山・阿部ほかで共通に獲得されている子音を取り出すと次の通りである。

タ行のタテト[t]・チ[tɕ]、マ行[m]、ヤ行[j]、バ行[b]

年齢 3 歳 6 か月（3:6）以降で、報告者(a) 高木・安田、(b) 野田ほか、(d) 船山・阿部ほかで共通に獲得されている子音を取り出すと次の通りである。

カ行[k]、サ行のシ以外[s]・シ[ç]、タ行のツ[ts]、ハ行のヒ[ç]・フ[ɸ]、ラ行[r]、ザ行[dz]

そして、年齢4歳（4:0）以降で、すべての報告者で共通に獲得されている子音は次の通りである。

サ行のシ以外[s]、タ行のツ[ts]、ハ行のヒ[ç]、ラ行[r]、ザ行のジ以外[dz]

幼児が言語の調音方法を獲得していく過程において、子音によって獲得時期に遅速があることが判明している。日本語を母語とする乳幼児の場合、両唇音が比較的早期に獲

得され、母音アとの組み合わせがよく観察される。上記の表1でも両唇音のマ行[m]やバ行[b]は早く獲得されている。一方、摩擦音や破擦音、弾き音などは遅れる傾向がある。上記の表1でも摩擦音のサ行[s][ɕ]・ハ行のヒ[ç]、破擦音のタ行のツ[ts]・ザ行のジ以外[dz]、弾き音のラ行[r]の獲得は遅れている。

3. 『南京玉』で本来の子音ではなく、別の子音で発音されている語句

『南京玉』でオカシイをオカチイと表記してあるような、本来の子音とは異なる子音で発音していると判断できることばを抽出した。表2では、語句の欄に本文における表記を示す。漢字表記に対して振り仮名のある場合は、それを括弧の中に入れる。見出しの欄に本来の子音による発音を平仮名で示す。発音が問題となる部分が助動詞「ます」の場合は、見出しを「自立語+付属語」の形にする。それぞれの語句に関して、漢字の欄に漢字表記、品詞等の欄に品詞等の文法情報、本来音の欄に見出しの本来の子音、発音の欄に語句中の子音の発音、用例数の欄に見出しの件数における語句の件数を示す。(注5) なお、表1を利用するため、表2では語中のガ行、バ行を語頭と同様に[g]、[b]で表すことにする。固有名詞や音省略のある語句はここにあげていない。

表2　本来の子音ではなく、別の子音で発音されている語句

番号	語句	見出し	漢字	品詞等	本来音	発音	用例数
1	オウチイ・大チイ	おおきい	大	形	k	tɕ	8/14
2	起（オ）チテル	おきる	起	動上一	k	tɕ	1/4
3	電灯（デンチ）	でんき	電気	名	k	tɕ	1/6
4	大（オホ）チナ	おおきな	大	連体	k	tɕ	1/7
5	来（チ）テ	くる	来	動カ変	k	tɕ	2/4
6	明日（アチタ）	あした	明日	名	ɕ	tɕ	1/5
7	イラッチャイ	いらっしゃる		動五段	ɕ	tɕ	1/2
8	オモチロイ	おもしろい	面白	形	ɕ	tɕ	6/10
9	キマチタ	きました		助動	ɕ	tɕ	1/7
10	白（チロ）イ・チロク	しろい	白	形	ɕ	tɕ	5/10
11	チタ	する	為	動サ変	ɕ	tɕ	1/14
12	デキマチタ	できました		助動	ɕ	tɕ	1/3

13	ワッチョイ、ワッチョイ	わっしょい、わっしょい		感	ɕ	tɕ	1/1
14	ヲ、カ、チイ	おかしい		形	ɕ	tɕ	2/6
15	一チョ	いっしょ	一緒	名	ɕ	tɕ	1/1
16	白煙（チロケムリ）	しろけむり	白煙	名	ɕ	tɕ	1/1
17	下（チタ）	した	下	名	ɕ	tɕ	1/2
18	イケマテン	いけません		助動	s	t	1/2
19	生徒（テイト）	せいと	生徒	名	s	t	1/3
20	先生（テンテイ）	せんせい	先生	名	s	t	1/1
21	ホネヲリドンノクパビレモウケ	ほねおりぞんのくたびれもうけ	損草臥	句	dz t	d p	1/1
22	蒲鉾（カマゴコ）	かまぼこ	蒲鉾	名	b	g	2/2
23	一人（チトリ）	ひとり	一人	名	ɕ	tɕ	2/5
24	ブル	ふる	降	動五段	ɸ	b	7/17
25	トバンネ	とう	届	動五段	w	b	1/1
26	シンデン	しんねん	新年	名	n	d	1/1
27	ジャボン	ざぼん	朱欒	名	dz	dz	1/1
28	チイチャイ	ちいさい	小	形	s	tɕ	11/15

表2において、複数の語句に共通に子音の交代が現れているものをあげる。番号1「オウチイ・大チイ」から番号5「来（チ）テ」までは、キがチと発音された音節の子音（[k]が[tɕ]となったもの）を含む語句である。異なる語句で5例、延べにして13例存する。その見出しの延べは35例である。キ[k]の調音確立は63%になる。番号6「明日（アチタ）」から番号17「下（チタ）」までは、シがチ、ショがチョと発音された音節の子音（[ɕ]が[tɕ]となったもの）を含む語句である。異なる語句で12例、延べにして22例存する。その見出しの延べは62例である。シ・ショ[ɕ]の調音確立は65%になる。番号18「イケマテン」から番号20「先生（テンテイ）」までは、セがテと発音された音節の子音（[s]が[t]となったもの）を含む語句である。異なる語句で3例、延べにして3例存する。その見出しの延べは6例である。セ[s]の調音確立は50%になる。

表1で、タ行のタテト[t]・チ[tɕ]は年齢3歳5か月以前に獲得されているが、カ行[k]、サ行のシ[ɕ]は年齢3歳6か月以降で獲得されること、サ行のシ以外[s]は年齢4歳以降で獲得されることを確認した。その内容と表2のこの結果はよく合致する。

次に、特定の語句に子音の交代が複数例現れているものをあげる。番号23「一人（チトリ）」は、ヒがチと発音された音節の子音（[ç]が[tɕ]となったもの）を含む語句である。この調音が5例中2例に見られる。ヒ[ç]の調音確立は60%になる。番号24「ブル」は、フがブと発音された音節の子音（[ɸ]が[b]となったもの）を含む語句である。この調音が17例中7例に見られる。フ[ɸ]の調音確立は59%になる。番号28「チイチャイ」は、サがチャと発音された音節の子音（[s]が[tɕ]となったもの）を含む語句である。この調音が15例中11例見られる。サ[s]の調音確立は27%になる。

表1で、タ行のチと拗音[tɕ]、バ行[b]は年齢3歳5か月以前に獲得されているが、ハ行のフ[ɸ]は年齢3歳6か月以降で、サ行のシ以外[s]とハ行のヒ[ç]は年齢4歳以降で獲得されることを確認した。その内容と表2のこの結果はよく合致する。

番号22「蒲鉾（カマゴコ）」は、ボがゴと発音された音節の子音（[b]が[g]となったもの）を含む語句である。この調音が2例中2例に見られる。表1で、バ行[b]は年齢3歳5か月以前に獲得されている。しかし、ガ行[g]の獲得時期については報告者(a) 高木・安田、(b) 野田ほか、(d) 船山・阿部ほかによって違いがある。報告者(a) 高木・安田、(d) 船山・阿部ほかは年齢3歳5か月以前、報告者(b) 野田ほかは年齢3歳6か月以降としている。『南京玉』に記載されている内容は3歳児のものであること、幼児の調音確立に個人差が予想されることなどを考慮し、この例は報告にとどめる。

最後に、特定の語句に子音の交代が1例のみ現れているものをあげる。番号21「ホネヲリドンノクパビレモウケ」は、ゾがドと発音された音節の子音（[dz]が[d]となったもの）、タがパと発音された音節の子音（[t]が[p]となったもの）を含む語句である。表1で[d]の獲得時期が(a) 高木・安田、(d) 船山・阿部ほかは年齢3歳5か月以前、(b) 野田ほかは年齢4歳6か月以降というように報告者によって異なる。しかし、[dz]の獲得時期がどの報告者においても年齢5歳6か月以降であり、[d]よりもはるかに遅い点で合致する。[t]が[p]となったものは報告にとどめる。番号27「ジャボン」はザがジャと発音された音節の子音（[dz]が[dz]となったもの）を含む語句である。表1で[dz]の獲得時期が3歳5か月以前か3歳6か月以降かというように報告者によって半年ほど異なるが、[dz]の獲得時期が[dz]よりもはるかに遅い点で合致する。なお、番号25「トバンネ」はワがバと発音された音節の子音（[w]が[b]となったもの）を含む語句、番号26「シンデン」はネがデと発音された音節の子音（[n]が[d]となったもの）を含む語句である。これらも、結果の報告にとどめる。

以上のように、『南京玉』で本来の子音ではなく、別の子音で発音されている語句を抽出し、幼児が子音の調音を確立する時期と対照させた。複数の語句に共通に子音の交

代が現れている場合や、特定の語句に子音の交代が複数現れている場合では、まだ獲得できていない子音を既に獲得している子音で調音していることが明らかになった。

4. 音韻プロセス分析

『南京玉』には、上に述べたような子音の交代する現象だけではなく、子音や母音の脱落、あるいは挿入のような現象も見られる。現在、子どもの発音の誤りを多角的に分析し、より効果的かつ効率的な臨床を行うための音韻プロセス分析ツールが開発されている。その分類方法を利用して、『南京玉』における本来の発音とは異なると判断できる語句を整理する。表 3 に、分析に用いられる音韻プロセスの一覧を示す。(注6)

表3　分析に用いられる音韻プロセスの一覧

〈1〉語全体プロセス	
1.省略プロセス	
1.1子音の省略	例　かに　[kani]　→　[ani]
1.2語の一部や音節の省略	例　ばす　[basɯ]　→　[ba]
1.3子音調和・同化	例　くち　[kɯtɕi]　→　[kɯki]
1.4特殊音節・子音結合の単純化	例　ぽけっと　[poketto]　→　[poketo]
〈2〉分節音変化プロセス	
1.音声化プロセス	
1.1有声音化	例　きりん　[kiriN]　→　[giriN]
1.2無声音化	例　ごはん　[gohaN]　→　[kohaN]
2.調音点および調音様式プロセス	
2.1前方化	例　ねこ　[neko]　→　[neto]
2.2後方化	例　ないてる　[naiterɯ]　→　[naikerɯ]
2.3破裂音化	例　さかな　[sakana]　→　[takana]
2.4摩擦音化／破擦音化	例　くち　[kɯtɕi]　→　[kɯɕi]
2.5流音・摩擦音のわたり音化	例　そら　[sora]　→　[soja]
2.6硬口蓋音化	例　たいこ　[taiko]　→　[tɕaiko]
2.7軟口蓋音化	例　あし　[aɕi]　→　[aki]
3.鼻音化プロセス	
3.1鼻音化	例　らっぱ　[rappa]　→　[nappa]
3.2非鼻音化	例　みかん　[mikaN]　→　[bikaN]

上の音韻プロセスに相当する語句を『南京玉』から取り出してあげていく。接近音[w]、[j]も子音として扱う。ラ行は[ɾ]ではなく[r]で示す。撥音の場合、実際の音声は環境によって異なるが、語中に現れるときは[n]、語尾に現れるときは[N]で示すことにする。前節の表2では、表1を利用するために語中のガ行、バ行を語頭と同様に破裂音の[g]、[b]で表したが、音韻プロセスによる分析では[ɣ]、[β]で表し、破裂音ではなく摩擦音として扱うことにする。

5. 音韻プロセスによる『南京玉』の語句の分析

『南京玉』の語句を表3の音韻プロセスに従って整理し、特色を記述する。語句の掲示方法は、先に本来の発音を平仮名で表記し、矢印の後に『南京玉』の例を漢字と片仮名とで表記するものである。

（1）〈1〉語全体プロセスにおける 1.省略プロセス

1.1子音の省略

かわいらしい[kawairaɕi:] → カアイラシイ[ka:iraɕi:]

（きょうの）ゆめ[jɯme] → ウメ[ɯme]

こさえよう[kosaejo:] → コサハウ[kosao:]

1.2語の一部や音節の省略

きかせよう[kikasejo:] → カショー[kaɕo:]

ところ[tokoro] → コロ[koro]

おねえちゃんたち[one:tɕantatɕi] → オネエチャンチ[one:tɕantɕi]

しかられる[ɕikarareru] → シカレル[ɕikareru]

1.3子音調和・同化

みやもと[mijamoto] → 宮本（ミヤモモ）[mijamomo]

ちいさい[tɕi:sai] → チイチャイ[tɕi:tɕai]

せいと[seito] → 生徒（テイト）[teito]

（ぶんぶく）ちゃがま[tɕaɣama] → 茶釜（チャママ）[tɕamama]

語全体にかかわる省略プロセスとして、『南京玉』では子音の省略、語の一部や音節の省略、子音調和・同化の現象が見られた。子音調和・同化にあげた語句「チイチャイ」「テイト」は表2にあるが、それ以外は表2に示さなかったものである。子音の省略では接近音[w]、[j]が省略されている。

（２）〈2〉分節音変化プロセスにおける 1.音声化プロセス

1.1有声音化

おふとん[oɸɯtoN] → オブトン[oβɯtoN]

分節音変化にかかわる音声化プロセスとして、有声音化の現象が見られた。「オブトン」は表２に示さなかったものである。

（３）〈2〉分節音変化プロセスにおける 2.調音点および調音様式プロセス

2.1前方化

くたびれ[kɯtaβire] → クパビレ[kɯpaβire]

おはおり[ohaori] → オバオリ[oβaori]

2.2後方化

かまぼこ[kamaβoko] → 蒲鉾（カマゴコ）[kamaɣoko]

ざぼん[dzaβoN] → ジャボン[dzaβoN]

ちいさい[tɕi:sai] → チイチャイ[tɕi:tɕai]

2.3破裂音化

いけません[ikemaseN] → イケマテン[ikemateN]

せいと[seito] → 生徒（テイト）[teito]

せんせい[sense:] → 先生（テンテイ）[tente:]

（ほねおり）ぞんの[dzonno] → ドンノ[donno]

ふる[ɸɯrɯ] → ブル[bɯrɯ]

しんねん[ɕinneN] → シンデン[ɕindeN]

2.4摩擦音化／破擦音化

摩擦音化

とわんね[towanne] → トバンネ[toβanne]

破擦音化

あした[aɕita] → 明日（アチタ）[atɕita]

いらっしゃい[iraccai] → イラッチャイ[irattɕai]

おもしろい[omoɕiroi] → オモチロイ[omotɕiroi]

きました[kimaɕita] → キマチタ[kimatɕita]

しろい[ɕiroi] → チロイ[tɕiroi]

した（サ変動詞）[ɕita] → チタ[tɕita]

できました[dekimaɕita]　→　デキマチタ[dekimatɕita]

わっしょい[waccoi]　→　ワッチョイ[wattɕoi]

おかしい[okaɕi:]　→　ヲ、カ、チイ[okatɕi:]

いっしょ[icco]　→　一チョ[ittɕo]

しろけむり[ɕirokemuri]　→　白煙（チロケムリ）[tɕirokemuri]

した[ɕita]　→　下（チタ）[tɕita]

ひとり[ɕitori]　→　一人（チトリ）[tɕitori]

2.6硬口蓋音化

おおきい[o:ki:]　→　オウチイ[o:tɕi:]

おきてる[okiteɯ]　→　起（オ）チテル[otɕiteɯ]

でんき[denki]　→　電灯（デンチ）[dentɕi]

おおきな[o:kina]　→　大（オホ）チナ[o: tɕina]

きて[kite]　→　来（チ）テ[tɕite]

ざぼん[dzaβoN]　→　ジャボン[dzaβoN]

ちいさい[tɕi:sai]　→　チイチャイ[tɕi:tɕai]

2.7軟口蓋音化

かまぼこ[kamaβoko]　→　蒲鉾（カマゴコ）[kamaɣoko]

前方化については他のプロセスが起きていない2例のみをあげた。前方化の起きているすべての異なる語句をあげると11例になる（「オウチイ」「起（オ）チテル」「電灯（デンチ）」「大（オホ）チナ」「来（チ）テ」「一人（チトリ）」「トバンネ」「宮本（ミヤモモ）「茶釜（チャママ）」）。

破擦音化については硬口蓋音化にあげた7例のうち「ジャボン」を除く6例が重複するので、それらを除いてあげた。すべての異なる語句をあげると19例になる（「オウチイ」「起（オ）チテル」「電灯（デンチ）」「大（オホ）チナ」「来（チ）テ」「チイチャイ」）。

摩擦音化は語中のバ行音への変化に見られた。一般的に語頭のバ行が破裂音であるのに対し、語中のバ行は摩擦音である。音韻プロセスによる分析で語中のバ行を摩擦音として扱ったため、この結果になった。

分節音変化にかかわる調音点および調音様式プロセスでは、前方化、破裂音化、破擦音化、硬口蓋音化の現象がよく観察され、その中でも破擦音化が多く抽出できた。流音・摩擦音のわたり音化は抽出されなかった。前方化と硬口蓋音化は表2において番号1から番号5までにあがった語句（[k]が[tɕ]となったもの）で主に起きている。

（４）[2] 分節音変化プロセスにおける3.鼻音化プロセス

3.1鼻音化

みやもと[mijamoto]　→　宮本（ミヤモモ）[mijamomo]

（ぶんぶく）ちゃがま[tɕaɣama]　→　茶釜（チャママ）[tɕamama]

3.2非鼻音化

しんねん[ɕinneN]　→　シンデン[ɕindeN]

分節音変化にかかわる鼻音化プロセスでは、鼻音化、非鼻音化ともに抽出した。ここにあげた鼻音化の例は1.3子音調和・同化に、非鼻音化の例は2.3破裂音化にも一度あげてある。

（５）「表3　分析に用いられる音韻プロセスの一覧」の分類にあてはまらないもの

1.子音の添加

すいがみをくう[sɯiɣamiokɯ:]→　スイガミヨク[注7][sɯiɣamijokɯ]

べにお[beɲio]　→　ベニヨ[beɲijo]

こさえんと[kosaento]　→　コサハント[kosawanto]

2.特殊音節化

ちいさい[tɕi:sai]　→　チイサン[tɕi:saN]

子音の添加のプロセスは接近音[w]、[j]が添加されている。特殊音節化のプロセスでは語末が撥音になっているが、「チイサンダルマサン」（『南京玉』111頁）というように「ダルマサン」に修飾するので、句末の「ン」との関係によるかとも考えられる。

中村・小島・藤原(2015)は健常発達における音韻プロセスを調査し、次のように述べている。以下、この調査を「調音調査」と呼ぶことにする。

> 健常発達で認められる音韻プロセスは、語全体プロセスでは「子音の省略」「子音の調和・同化」、分節音変化プロセスでは「前方化」「破裂音化」「摩擦音化・破擦音化」「口蓋音化」であった。また、これらの音韻プロセスは、３歳代までに「子音の省略」「子音の調和・同化」「前方化」「摩擦音の破裂音化」「摩擦音化・破擦音化」、４歳代までに「弾き音の破裂音化」、５歳代までに「硬口蓋音化」が消失した。

『南京玉』で認められる音韻プロセスは、語全体プロセスでは「子音の省略」「語の

一部や音節の省略」「子音の調和・同化」、分節音変化プロセスでは「前方化」「後方化」「破裂音化」「摩擦音化・破擦音化」「口蓋音化」「鼻音化」「非鼻音化」であった。中村・小島・藤原（2015）の調音調査と異なるプロセスは「語の一部や音節の省略」「後方化」「鼻音化」「非鼻音化」である。そのうち、多数の語句例が見られたのは「語の一部や音節の省略」である。

調音調査は保育園に通う100名を超える幼児を対象にして絵カードを呼称させる方法で実施したものである。発達途上における音韻プロセスを明らかにすることを目的としている。一方、『南京玉』は母親が我が子の日常の発話をその時々に「創作」(注8)と捉えて記録したものである。その実施方法も目的もまったく異なる。調音調査の結果によって、幼児の調音発達の大勢が把握でき、『南京玉』のような記録の分析がその大勢を補塡すると考える。

6. おわりに

金子みすゞの表記に着目して、『南京玉』からオカチイのように本来の発音とは異なると判断できることばを取り出し、調音（音韻）上の特色を追究した。その結果を以下にまとめて述べる。

『南京玉』で本来の子音ではなく、別の子音で発音されている語句を抽出し、幼児が子音の調音を確立する時期と対照させた。複数の語句に共通に子音の交代が現れている場合や、特定の語句に子音の交代が複数現れている場合では、まだ獲得できていない子音を既に獲得している子音で調音していることが明らかになった。

中村・小島・藤原(2015)の調音調査によると、3歳児の健常発達で認められる音韻プロセスは、語全体プロセスでは「子音の省略」「子音の調和・同化」、分節音変化プロセスでは「前方化」「破裂音化」「摩擦音化・破擦音化」「口蓋音化」である。『南京玉』の調査でも上のプロセスが認められたが、異なるプロセスも認められた。そのうち、多数の語句例が見られたのは「語の一部や音節の省略」である。

調音調査は絵カードを呼称させる方法で実施したものであり、『南京玉』は母親が我が子の日常の発話を記録したものである。その実施方法も目的もまったく異なる。調音調査の結果によって、幼児の調音発達の大勢が把握でき、『南京玉』のような記録の分析がその大勢を補塡すると考える。

〈注　記〉

注１　表１には高木・安田（1967）の「表４　固定的に構音可能であった子どもの人数」

で90%を超える完成率になる子音を年齢に配置した。ただし、[b]は4:6〜4:11で89%になるが、他の年齢はすべて100%であるので、3:0〜3:5に示した。

注2　表1に野田ほか（1968）とあるのは、野田雅子（1981）の151頁で「表6　90%以上正しく構音された時期」に「野田ほか（1968）」として示してある結果を用いた。

注3　表1には中西・大和田ほか（1972）の「表7　子音別誤率（%）」ですべての条件で誤率が10%未満になる子音を年齢に配置した。

注4　表1には船山・阿部ほか（1989）の「表5　構音獲得の状態―全ての単語で正しい構音を示した人数の割合」で「80〜99%」「100%」の欄にある子音を年齢に配置した。

注5　「オ羽織（バオリ）」「オブトン」のように接辞が付いて濁音化しているもの、「タレモ」のように見出し語「ダレ」13例のうち1例のみ濁点の付かない表記のものは、この表に取り上げなかった。

注6　表3は川合（2011）の分類によるが、中村・小島・藤原（2015）にある例を一部使用した。

注7　「スイガミヨク」は「すいがみをくう（粋が身を食う）」の変化したものである。昭和5年1月に「「スイガミヨク」／「京ノウメ大阪ノウメ」／ハイッ、テトルノネ」（『南京玉』104頁）のように、かるたで遊ぶ様子が記録されている。

注8　『南京玉』の冒頭に、「この子の言葉は、意味はなくとも、また、『詩』なんぞはなほのこと、えんもゆかりもなくっても、ただ、『創作』でさへあれば、残らず書いてゆく事だ。」とある。

〈参考文献〉

金子みすゞ（2003）『南京玉』JULA出版局

川合紀宗(2011)「新版構音検査と併用可能な音韻プロセス分析ツールの開発」『音声言語医学』52

高木俊一郎・安田章子(1967)「正常幼児（3〜6才）の構音能力」『小児保健研究』25（1）

中西靖子・大和田健次郎・藤田紀子(1972)「構音検査とその結果に関する考察」『特殊教育研究施設報告』1

中村哲也・小島千枝子・藤原百合(2015)「健常発達における音韻プロセスの変化」『リハビリテーション科学ジャーナル』10

野田雅子(1981)『乳幼児のことば　その発達と障害の指導』大日本図書株式会社

野田雅子・岩村由美子・内藤啓子・飛鳥井きよみ(1968)「幼児の構音能力の発達に関する研究」『日本総合愛育研究所紀要』4

濱千代いづみ（2019)「金子みすゞ『南京玉』に見られる3歳児のことばの特色」『岐阜聖徳学園大学紀要』58
船山美奈子・阿部雅子・加藤正子・斉藤佐和子・竹下圭子・西村弁作・山下真司・山下夕香里(1989)「構音検査法に関する追加報告」『音声言語医学』30